

者はもっともっと増えていたに違いない」と自負し確信している。哈爾浜学院は、日本及び日本人のために大変役立つたということを、声を大にして誇ることができる。

昭和二十年六月二十三日沖繩の陥落、八月の広島、長崎への原爆投下により多くの犠牲者が出たこと、そして終戦記念日などは毎年新聞、テレビ等で報道されるのに、日ソ中立条約を一方的に破棄して、八月九日未明、ソ連軍が満州、樺太、千島に侵攻し、一部地区においては停戦協定成立後まで攻撃を継続していたことなどを報道するマスコミは皆無である。日本軍の戦死者、傷病者、そしてソ連抑留者の死者、在留邦人の犠牲者が数多く出たのだ。その結果、残留婦人、残留孤児の悲劇も起きてきたのである。なぜ報道しないのか。このことを不思議に思うのは、私一人ではないだろう。

## 戦争と父と私

神奈川県 山 県 恵美子

私は旧満州国の奉天市で生まれ、その十年後には、祖国が破れるという、悲しくも厳しい現実に出会いました。終戦前後の経過は子供でしたので、日時や場所、地名などは詳細には書けません。強烈に焼きついている記憶などを頼りにペンを進めることにいたします。

私の父、金子春治は奉天市の中央郵便局に勤務しておりました。れんが造りの二重窓の官舎に、両親、私、弟、妹の五人家族で住んでおりました。官舎の住所は、奉天市霞町十三番地だったと思います。

なぜ、父が祖国を離れて満州に渡ったのかは、父に直接聞く機会がなく、戦後に伯父に話してもらいました。父は、岐阜県高山市で金子家の長男として生まれ、親の手助けをしながら小作農に従事していました。

が、日当十八銭で生活が苦しく、その貧乏生活から抜け出すために満州に渡ることを決意して、故郷高山を離れたということでした。

すでに、奉天市に在住していた開沼さんという、父の叔母さんを頼って奉天に渡ったのだそうです。その叔母さんが、父の就職や結婚の世話をしてくれたとのことでした。

昭和十七年、私が七歳の冬に、子供三人を残して母は他界いたしました。

仕事と幼い年子三人を抱えての生活で、困り果てた父は、昭和二十年三月、世話をしてくれる人があって再婚したのです。継母は二十七歳で、美しい方だったと記憶に残っています。苦難の多いことは承知で、後妻の道を選んだ継母の覚悟のほどは、いかばかりであったろうかと今になっても察しています。直接に聞いたことはありませんが、とにかくもよくぞ耐えてくださったと感謝するばかりです。

新しい母を迎えての幸せな生活は、わずか三カ月で破られてしまいました。それは、もうあまり若くはな

い父へ召集令状が届いたのです。

出発までの数日間、灯火管制下の薄暗い電灯の下で、軍人勅諭を暗記しようとして一生懸命に努力していた父の姿が忘れられません。私たち子供までが「一、軍人は忠節を尽くすを本分とすべし。一、……」と覚えてしまったものです。

異国の地に、新妻と三人の子供を残して戦地へ赴く父の心の奥は、どんなであったろうかと考えさせられます。

そのころになると、爆撃に備えて家の前に防空壕が掘られました。空襲警報のサイレンが鳴るたびに逃げ込んでいました。一度だけ私一人が逃げ遅れたとき、近くに爆弾が落とされて、ものすごい爆発音と共に激しく家が揺れたのです。逃げようとする意思はあっても、恐怖心で体が硬直して動けなくなっていました。

そうこうしているうちに、八月十五日を迎えたのですが、家にはラジオもなく、感情が波立つような劇的な光景はみられません。大人たちの会話から、日本が負けたことを漠然として知ったという程度だっ

たのです。

終戦の日を境として、日本人の現地における優位性は逆転したことを肌でひしひしと感じ、不安におびえることとなりました。

八路軍が攻めてくるといううわさ、どこそで中国人の暴動発生という情報、市内の百貨店の略奪暴行の話、街を歩いていた男性が連行されたということなど、危険に取り囲まれていることが、ひしひしと伝わってきました。

母子家庭では心細いであろうと、継母の両親や、その弟妹七人が官舎に移ってきましたが、ただでさえそんなに広くない官舎で、二世帯十人での共同生活が始まったのです。

入浴は以前から官舎の共同風呂でしたので、個々の家には風呂の設備はなく、入浴は全く望みませんでした。不衛生と栄養不良などで体の抵抗力が落ちたところで、家族が次々と発疹チフスにかかり、枕を並べて寝込んでしまいました。頭髮には黒いシラミ、肌には白いシラミがたかりました。頭髮のシラミ退治のとき

には、下に紙を敷き、目の細かいすきぐしを使ってシラミを落とすのですが、シラミが紙の上に落ちる様子は、ちょうどバラバラと雨が降るごとき様といっても過言ではありません。

かつて、道端に腰をおろしてシラミ取りをしている中国人を笑ったものですが、今は我が身のことになってこようとは思いつかないことでした。今でも、シラミと聞くだけで背筋にぞーっと悪寒が走ります。

我が家では、ソ連兵により二回、日本人により一回、押し込み強盗団の被害に遭いました。我が家は官舎の角地でしたので、賊にねらわれやすかったのかもかもしれません。就寝中にドアをけ破る音に目を覚ますと、長い銃を構えたソ連兵が侵入していました。恐ろしくて恐ろしくて、頭から布団をかぶって体を硬くして縮こまっていました。継母の父と弟が殴られて金品を奪われましたが、それでどうにか家族の命は助かったのです。

そのころ、日本人の若い女性たちは難を避けるために、ほとんどの人は髪の毛をそって丸坊主になってい

ましたが、やはり青々とした地肌と細いうなじは一見して女性と見破られてしまうものでした。見ていて痛々しくて、私は子供でよかったと思ったものでした。

しばらくすると街なかも落ち着きを取り戻し、治安も良くなってきましたし、外出も可能になりました。

生活の糧を得るために、商いを始めることになりました。祖父たちが大福餅を作り、私たち家族がみんなで売り歩くことになりました。箱に餅を並べて、駅弁売りと同じようなスタイルで、「大福餅はいかがですか、お餅はいかがですかあ！」と声を張り上げて街中を流して歩きました。最初は恥ずかしくて声など出ませんでした。慣れるということとは怖いもので、段々と大声が出せるようになってきました。そのうちには、飲み屋の客を相手に押し売りますが、いのものできるほどに、厚かましく振る舞うようになり、自分でも驚くほどになりました。

餅はおもしろいように売れましたが、ある日のこと、街角に立っていた人に声をかけられ、餅を全部買

うと言われて喜んで渡してしまいました。そして金を持ってくるからと言いつつ残してそのまま行ってしまいました。私は待つていましたが、いつまでたっても金を持ってきませんでした。結局、だまされてしまったのでした。この体験以後は、人を見たら泥棒と思えの意識が抜けません。そのほか、優しそうな中国人に笑顔で話しかけられ、連れて行かれそうになったこともありました。

昭和二十一年の春になって待望の引揚げが開始されました。

八月三日、日本人は北奉天駅に集結するように指示が出ました。引揚げ準備が始まり、リュックサックを仕立てて、衣類や食糧を詰められるだけ詰め込みました。米、粟、麦こがし、水の代用としてキュウリ、トマトなどを持ちました。

北奉天駅から無蓋貨車（屋根のない貨車）に乗り込みましたが、当初は人を中央に座らせて荷物は貨車の内側周囲に配置しました。しかし、停車するたびに荷物が盗まれるので、途中から中央に荷物をまとめて置

き、周囲に人が座るように変えました。

駅々では中国人の子供たちが、水や食べ物を売りにきました。また引揚船の入港待ちのために入った収容所では「子供を売らないか？」と中国人が押し掛けてきました。

引揚船に乗船する港は、当初は大連港という話でしたが、どうした理由か分かりませんが途中で壺蘆島の港に変わりました。砂原で何もない港でしたが、そこで船が入ってくるのを待ちました。

引揚船の名前は、「Tの十九号」という船でした。食事は粗末で、芋の茎が数本浮いている汁だけの食事だったことが印象に残っています。航海途中は船の揺れが激しくて、私などは胃液まで吐くほどの苦しい船酔いで過ごしました。

朝方のことでした。白いもやに包まれた海のかなたに、ぼんやりと黒い陸地が見えました。「ああ、あれが祖国だ、あれが日本なのだ！」と、初めてまみえる祖国に、物事に鈍感な子供の私にも、歓喜と深い感動が体中を駆けめぐりました。船は博多港に入港しまし

たが、船内では上陸前夜祭として演芸会が催されました。そこで私は、終戦後すぐに日本国内で流行した「リンゴの歌」を初めて聞きました。

楽しかった余韻がまだ残っている翌朝、どうしたところか、船は沖に向かって移動しているのです。待ち焦がれた上陸はどうなるのかと気持ちがいら立ってきました。

船内放送などによると、船内に疑似コレラ患者が出たとのこと。数日沖合で停泊したと思いますが、その間に全員の検便が繰り返されました。検便の方法はというと、老若男女を問わず検査官の前に背を向けてかがみ込み、着物をまくって尻を出します。検査官が、材質は何だかよく分かりませんが、細い棒状の物を肛門に入れるというものでした。混乱の最中とはいえ、人間の尊厳などというものはあったものではありません。子供の私でさえも大きな抵抗があったのですから、成人の方、特に女性の方はさぞかしつらく、恥ずかしかったことと思います。しかし一日でも早く上陸したい気持ちから、だれも文句を言わずに神妙に協

力していました。

ようやくのことで、船は博多港に接岸して上陸が開始されました。上陸をすると待ち構えていた係官が、DDTの白い粉をわしづかみにして、私たちの頭から体全身に振りかけました。

祖父母たちとは博多駅で別れました。私たち弟妹三人は継母に連れられて父のふる里である高山に向かいました。高山に着いたのは九月十七日だったと記憶しています。高山に向かっていている汽車の旅の途中で、引揚援護局の方々でしょうか、「お帰りなさい、ご苦労様でした」などと優しくねぎらいの言葉をかけてくださいましたことが大変にうれしく、祖国のぬくもりをしみじみと肌で感じました。

帰郷したその日は、ちょうど地元の辻が森神社の祭礼の日で山のようなごちそうが用意されていました。特に印象に残っているのは「ほう葉餅」です。鮮やかな緑のほうの葉で、つきたての白い餅を包み込んだものです。がつがつと食べたい気持ちには先行するのですが、胃袋が縮んでいて思う様にならずほんの少ししか

食べられませんでした。それにしても当時、都会は深刻な食料難の時代でしたのに、高山は豊かだったのですね。

高山に着いてしばらくして、継母と一緒に引き揚げてきた祖父母たちの待つ九州に帰って行かれました。致し方のないことでした。継母のおかげで今日、私たちは残留孤児という悲しい運命を背負わずに済んだのですから、いつになってもそのご恩への感謝の気持ちは忘れません。

早速に、父方の姉弟（伯母、叔父）が集まって親族会議が開かれて、三人の子供をこれから先どうするか、引き取り先などが相談されました。その結果、私は父の末弟にあたる叔父の家に、弟は父の妹の叔母の家に、妹は父の姉の伯母の家にと、それぞれ引き取られることが決められたのです。悲しいことですが、孤児院へ入れられることを思えば、ありがたい処遇でした。

昭和二十二年になって、待ちかねていた父がシベリアから復員してきました。

持ち帰った奉公袋の中に、木製の手作りのスプーンが入っていたのを覚えていました。

短い期間でしたが、伯母たちの家に別れ別れに引き取られていた子供三人も、それぞれ希望を持って戻りました。そして九州の実家に帰っていた継母も戻ってきて、新しい金子家の再出発が始まりました。

住居は山小屋で、明かりはランプ、水は山からの清水、そして風呂はドラム缶という生活でした。貧しいながらも楽しい我が家……となるはずでした。

復員後の父は、転職先のあてのないままに山奥深い所での伐採の仕事を始めました。一度だけ、父について山仕事を見に行ったことがありました。危険と背中合わせの仕事でした。特に危ないのは、木馬挽きという仕事です。切り倒した木を、木ぞりに積み上げて山道を下って行くのです。山道には鉄道の枕木のように丸太が並べてあり、傾斜の急な箇所では矢のように駆け下ります。カーブにかかるときにかじ取りを誤ると転覆して、大けがをするか場合によっては命を落とすことにもなる危険な仕事です。万が一、父がつかまずけ

ば、重量のある木ぞりの下敷きになるのは明らかです。

また、平坦な山道に差しかかると枕木に油を塗り、小柄な父が歯を食いしるばるようにして引っ張って行きました。私は手も足も出せずに、ただ父の仕事を見ているだけでした。父の偉大さに敬服するばかりです。

父が晩年になって、足が痛むと言って寝込んだのはこの時代の重労働が原因ではなかったかと思えます。

戦争がなければ郵便局員として平穏な一生で暮らせたものを、そしてまたは、終戦まで小作農で持ちこたえていれば、裕福な暮らしが待っていたことでしょうにと思うばかりです。考えてみるに、運の悪い父でした。

山の伐採仕事だけでは金にならず、いつも継母が親類の家を回って米などを借り歩いていました。継母もさぞかしつらいことだったろうと思います。そして私と妹は、貴重な米を食いのばすために、毎晩、大根のみじん切りをしていました。いわゆる大根飯を炊くためです。

貧しさゆえの粗末な衣服、友達には見られたくない弁当、身体検査のときには肌着になるのがつらくて、欠席したこともありました。

このような状況にあつて、身の回りの小物ぐらいは親に頼らず自分で整えようと、アルバイトを始めたのです。

最初の仕事は豆腐屋の作業でした。朝、四時前後に豆腐作りの作業場に出掛けて、一晩水に浸してある大豆を石うすでひきます。水を吸った大豆は倍以上に膨れて、一斗から二斗ぐらいの量になっていましたが、それをひくのですから力と根気のいる仕事でした。しかし、賃金を受け取ったときの喜びはまた大きく、学用品などを買うことができたのです。とは言え、石うすひきの仕事は私の体力では無理があつて、間もなくやめました。

次にはバチンコの玉つめ作業に変わりましたが、時給で七、八円だったと記憶しています。

とにかく学習よりも現金が欲しい。それだけで頭がいっぱいの中学三年生でした。そして、今でいう不登

校児に近くなつていきました。

貧しさはまた、父母の仲もぎくしゃくさせました。それを間近に見るのもつらく、早く家を出たいと望んでいました。そんなときに、近所にいたBさんが就職の話を持ち込んでくれたのです。Bさんの親類が横浜で保育園を経営しており、そこで小間使いを探しているというのです。

あと二カ月待てば中学の卒業式というのに、その前の一月十九日に、私はBさんに付き添われて横浜に向かいました。やっと暗い過去から抜け出せる。未知の環境への期待に胸を弾ませていました。ところが、着いたその夜からホームシックにかかり、布団の中で泣きました。住み込みで働くということは、朝から晩まで、日曜日も祭日もお構いなく雑仕事に追われるのです。自由を束縛されることの苦しさを否応なしに思い知らされました。

住み込みの仕事は一年ほどで辞めて、郷里高山に帰りましたが、新しい弟妹も生まれていて、家は市営住宅に移っていましたが、私の落ち着く場所はありません

んでした。再度、横浜の保育園で働かせてもらうことになり、ふる里を去ったのでした。

保育園で働きながら、これからの人生をどうして過ごすべきかといういろいろ考えました。それには独立することだ。ではどうすれば独立できるだろうかとまた考えました。そして、まず考えついたことは、結婚するということでした。専業主婦になれば自由も得られるだろうと思ったのです。

昭和三十二年にお世話してくださる方がおられて、初めてのお見合いをして、その人との結婚に踏み切りました。小さな借家でしたが家も持って、自分だけの域もできて十分に満足したものです。

この年には二重の喜びがありました。結婚で自由が得られたことと、何度か挑戦していた保母の資格取得試験に合格したことです。

夫は誠実な人でよく働きましたが、仕事運が悪くて勤め先を転々としていました。子供も生まれましたが、給料の遅配などもあって先行き不安に思った私は、専業主婦をあきらめて、一生働き続ける覚悟で、

市の職員募集に応募して地方公務員に採用されたのです。

公立保育所の保母として働くようになって収入も安定し、生活にも余裕が出てきました。ところが運命のいたずらというのでしょうか、あるとき突然に、保育所長を命ぜられたのです。寝耳に水というのはこういうことを言うのだと思いました。学歴の無い自分が管理職に就く。その資格がお前にあるのか……と自問自答を繰り返して悩み抜きましたが、生活がかかっているので逃げ出すわけにはいきませんでした。

劣等感にくじけぬよう自分で自分を励まして努力を重ねて、背伸びしつつ三十年間の勤めをどうにか終えたのです。

今は年金に支えられて、物心両面の豊かな生活無し事に過ごしているところです。

私の上京後、苦勞をかけた継母は、一男二女を授かり、現在は高山で長男一家に囲まれて幸せな日々を送っています。

父は、生涯特別な趣味も、楽しみも持たずに、ただ

ひたすら家のために家族のために働き続けて、昭和五十三年二月七日に七十二歳で他界しました。早くに父の元を離れた私は、落ち着いての語らいの機会も無のままに、父に対する優しいねぎらいの言葉ひとつかけることなく別れてしまい、後悔ばかりが先に立ちます。

そして最も悔やまれるのは、父の出征から復員して来るまでの苦勞話を聞いてあげなかったことです。その罪悪感から父の七回忌にお詫びの思いを込めて、ガリ版ですが、父の追悼文集を作り供えました。

その際、父の戦友であった長崎にお住まいのK氏にも原稿をお願いして書いてもらいました。父の人生に大きな影響を与えた戦争、そしてそこで父はどんな生き方をしたか、さらには私の理解し得なかった父の人格も描かれていたのです。

K氏の手記に草鞋わらじのことが書かれていましたが、読みながら過去に戻って父に出会ったような気がいたしました。というのも、子供のころに学校での上履きは、いつも父の作った「わらぞうり」でした。父の作

る「わらぞうり」は、わら束がよく打ち込まれていて、柔らかく感触がよい物でした。鼻緒には色のついたぼろ布を裂いて編み込まれて華やかにみえたものです。父のそうした優しい心遣いに気が付いたのはずっと後のことでした。

開拓団員として、満州の奥地に入り言語を絶する苦勞をなされた方々の体験に比べれば、私などの体験を語るのはおこがましい限りですが、戦争のもたらす悲惨な運命をこれからの人々に知ってもらえればという気持ちから書きました。

戦争がなければ、戦争さえなければ、私たち家族の歩みも方向も異なった結果になったことでしょう。

与えられた運命の坂道を一步ずつ上ってきて、今、何不自由ない恵まれた日々を過ごし、平和の尊さ、ありがたさを思いつつ、これまでに会って来た人たちが全てに感謝する今日このごろです。